シリーズ　国際人権・随想㉔

アジア諸国と人権（その十六）

研究センター所長
京都大学名誉教授
安藤　仁介

インドに続いて、その隣国の島国スリ・ランカの人権問題を考えてみましょう。インド亜大陸の東南沖に位置し、日本の九州と四国を合わせたよりもやや広くて、約二千万の人口を抱えるこの国は、第二次世界大戦後の一九四八年に英連邦内の自治領セイロンとして独立しました。しかし一九七二年には新憲法を制定して英連邦から離脱し、国名をスリ・ランカ共和国と改めたのです。かつてこの国を訪れたマルコ・ポーロは「ここは世界で一番すばらしい場所だ」と言ったと伝えられますし、〝スリ・ランカ〟は〝光り輝く島〟を意味します。御承知のように、シンハラ系とタミール系の〝内戦〟が激化するまえは、この国は平和で、食べ物にあふれ、物価は安くて暮らしやすく、観光客で賑わう楽園のようなところでした。それが、なぜ悲惨な内戦状態に陥ったのか―それを検討するために、この国の歴史を簡単に振り返ってみましょう。

スリ・ランカの歴史は、その位置が示すとおり、インド亜大陸からいろいろな影響を受けてきました。スリ・ランカの人口構成は、シンハリ系が約四分の三、一八％余がタミール系、アラブ系が七・五％となっており、タミール系のうち五・六％は英国の植民地時代に大農場の労働者としてインド亜大陸から連れてこられた人たちで、あとで見るように土着のタミール系とは区別されています。大まかな宗教的分布は、シンハリ系が小乗系仏教徒、タミール系はヒンドゥー教徒、アラブ系（八～一〇世紀にやってきた交易商の末裔と思われる）はイスラム教徒がそれぞれ大半で、ほかにキリスト教徒もいます。このうち人口の九割以上を占めるシンハリ系とタミール系の先祖は、いずれもインド亜大陸からやってきたと見られています。また、仏教もヒンドゥー教もインドから伝えられました。さらに、英国の植民地から第一次大戦、第二次大戦を経て政治的独立を達成した経緯も似通った点が少なくありません。もっとも、仏教は発生地のインドではほぼ消滅したのに、小乗系仏教はスリ・ランカからミャンマーほかの東南アジア諸国へと広がりました。

このスリ・ランカが欧州諸国の植民地支配に晒されるのは、一六世紀はじめスペインと世界を二分して東方へ進出してきたポルトガルを嚆矢（こうし）とします。ポルトガル人の支配はスリ・ランカ側の内紛をも利して内陸部と東海岸を除く全域に及びましたが、一七世紀半ばにはオランダ人に取って替わられます。オランダ人は内陸部にも徐々に支配地域を広げ、とくに法制度の整備に力を入れて、南部や南西部のシンハリ人の間ではローマ法系列オランダ法が適用されました。また、ポルトガル人はカソリック旧教の、オランダ人は新教の、それぞれ布教に努めましたが、限られた成果しかあげられなかったようです。やがて一八世紀末、欧州でナポレオン戦争によりオランダ本国がフランスの支配下におかれると、英国が英領インド帝国からスリ・ランカ（かれらはセイロンと呼んだ）に手を伸ばして、一八〇二年には植民地とし、同年フランスとのアミアン条約によってこれを確認したのです。

英国は一八一五年には内陸部も制圧し、スリ・ランカ全島を支配下に置きました。政治的には、統治機関として行政院と立法院を設置して、後者には官吏以外のメンバーも任命し、英語を政府機関や学校教育の用語としました。また経済的には、国家独占や強制労働を廃止し、官有地を耕作者に安価で配分して、私企業による開発を奨励しました。とくに大規模農場（プランテーション）を強力に推進して、丘陵地のコーヒー（一八七〇年に葉の病気からコーヒーが駄目になって以降は紅茶）栽培やゴム生産に集中し、住み込み労働者を確保するために、インドから多数のタミール系人を送り込んだのです。